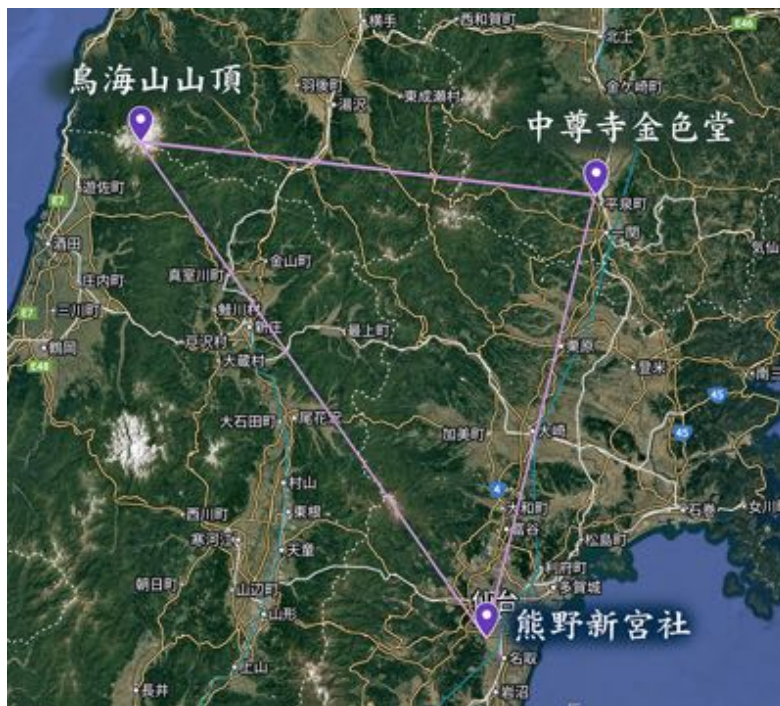


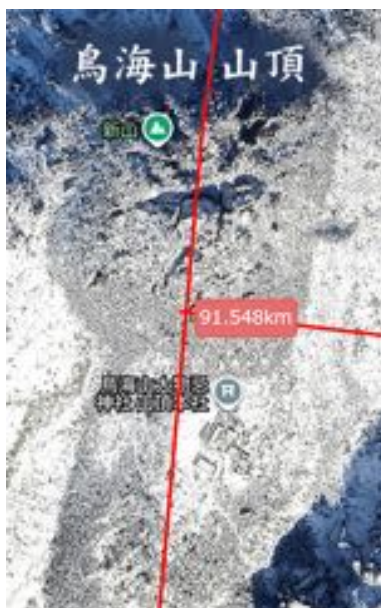
名取熊野と奥州藤原氏

●リスペクトしているサイト「名取老女とみちのくを旅する過去と未来」によると、名取熊野三社の中心熊野神社（新宮）の創建は1123年。1120年～1123年（保安年中）は、初代奥州藤原氏、藤原清衡の時代とのこと。それならばと、藤原氏と名取熊野のつながりを探してみることにした。

中尊寺金色堂



■烏海山山頂 ←← 91.548km →→ 中尊寺金色堂 →→ 91.548km →→ 名取熊野神社（新宮社）



■熊野神社（熊野新宮社）

熊野神社は、保安4年（1123年）に名取老女が創建したとされる熊野三社の一つで、江戸時代以前は新宮社と呼ばれ、熊野神社文書や一切経など、国・県・市の指定を受けた貴重な文化財が多数伝えられています。境内の奥には、熊野信仰と関係が深い建築様式で、江戸時代初期に建てられた県指定の熊野神社本殿があります。また、ご神池の浮島に建つ神楽殿では、毎年4月と10月の例祭で熊野堂神楽が披露され、池の中に組み立てた特別な舞台で舞われる熊野堂舞楽は、年1回、4月の例祭の時しか見ることができない貴重なもので、神楽と共に県指定の無形民俗文化財になっています。



当社が中世においても武士階層の土壌に根をおろし広く信仰を集めたことは、当社が所蔵する古文書（熊野神社文書）より数々の武士層からの寄進状によって知ることができます。伊達氏の時代においても、永正11年(1514)植宗が神領の棟役段銭を免除したことを先例として、晴宗、輝宗、政宗による免除が行われ、以後、歴代藩主の種々寄進、奉納を受け伊達家と深い結びつきを持っていたことが知られています。 祭神/速玉男尊、伊弉冉尊、事解男尊、菊理媛神 高館熊野堂字岩口上 51

■中尊寺金色堂

金色堂は中尊寺創建当初の姿を今に伝える建造物で1124年（天治元年）、奥州藤原氏初代清衡公によって上棟されました。数ある中尊寺の堂塔の中でもとりわけ意匠が凝らされ、極楽浄土の有様を具体的に表現しようとした清衡公の切実な願いによって、往時の工芸技術が集約された御堂です。

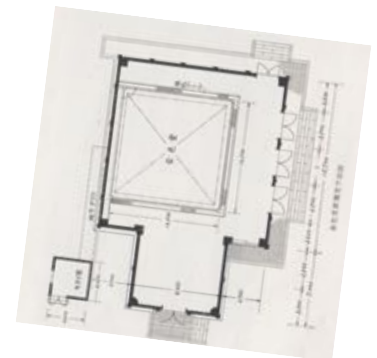


内外に金箔の押された「皆金色」と称される金色堂の内陣部分は、はるか南洋の海からシルクロードを渡ってもたらされた夜光貝を用いた螺鈿細工。そして象牙や宝石によって飾られています。須弥壇の中心の阿弥陀如来は両脇に観音勢至菩薩、六体の地藏菩薩、持国天、増長天を従えておられ、他に例のない仏像構成となっております。



この中尊寺を造営された初代清衡公をはじめとして、毛越寺を造営した二代基衡公、源義経を奥州に招き入れた三代秀衡公、そして四代泰衡公の亡骸は金色の棺に納められ、孔雀のあしらわれた須弥壇のなかに今も安置されております。

仏教美術の円熟期とも称される平安時代末期、東北地方の二度にわたる大きな戦いで家族をなくし、後にその東北地方を治めた清衡公が、戦いで亡くなってしまった全ての人々、そして故なくして死んでしまったすべての生き物の御魂を極楽浄土に導き、この地方に平和をもたらすべく建立した中尊寺の堂塔が古の栄華を今に伝えます。※中尊寺公式サイトより抜粋 岩手県西磐井郡平泉町平泉衣関202



●覆堂の中の正確な位置は、大岡實建築研究所サイトで設計図を見つけた。

■鳥海山山頂

1801年の噴火では死者8名の記録があり、生じた溶岩ドームは東鳥海山の新山として現在も残っている。

●鳥海山大物忌神社（ちょうかいさんおおものいみじんじゃ）

神社の創祀は欽明天皇二十五年（千四百余年前）の御代と伝えられている。鳥海山は活火山で、噴火などの異変が起こると朝廷から奉幣があり鎮祭が行われた。本社は山頂に鎮座し、麓に「口の宮」と呼ばれる里宮が吹浦と蔵岡の二ヶ所に鎮座する。大物忌神社は貞観四年（八六二）十一月官社に列し、延喜式神名帳には名神大社として、吹浦鎮座の月山神社と共に収載されている。後に、出羽國一の宮となり、朝野の崇敬を集めた。特に歴代天皇の崇敬篤く、八幡太郎義家の戦勝祈願、北畠顕信の土地寄進、鎌倉幕府や庄内藩主の社殿の造修など、時々の武将にも篤く崇敬されてきた。中世には神仏混淆以来、鳥海山大権現として社僧の奉仕するところとなったが、明治三年の神仏分離に際して旧に復して大物忌神社となった。明治四年五月に吹浦口の宮が国幣中社に列したが、同十三年七月に山頂本社を国幣中社改め、同十四年に吹浦・蔵岡の社殿を口の宮と称え、隔年の官祭執行の制を定めた。昭和三十年に三社を総称して現社号となる。山頂の御本殿は伊勢神宮と同じく二十年毎に建て替える式年造営の制となっており、現在のご本殿は平成九年に造営された。主祭神/大物忌大神 祭神/豊受姫命 ※公式サイトより

●円周ラインは大物忌神社から 25m ほど離れた西側の山頂近くを通った。鳥海山は何度も噴火を繰り返しているため、はたして 900 年前に同じ場所に祀られていたかは特定できない。特に 1801 年の噴火では新しい山頂になっている。いずれにせよ、おそらく火口の真ん中を起点としていたと思われる。下の写真で山頂の状態を見ると、ほぼ火口の真ん中をラインは通っていることがわかる。この祭祀線は信憑性がある。



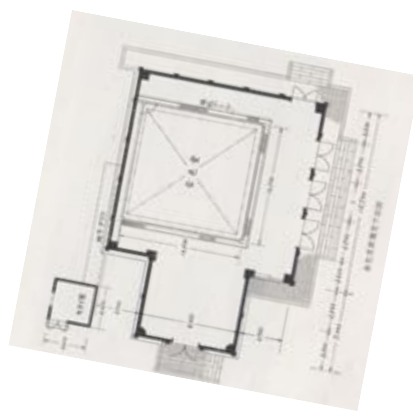
Youtube チャンネル「YAMAGATA IMAGES」さんより抜粋 中央に大物忌神社などの建物が見える

●出雲口伝では、鳥海山はもともと富山（とみやま）で出雲東王家「富家」の富が付けられた山名だと伝える。海が近いので海の字が使われたという。大朝日岳は大富権現、大沼は大富沼、津軽の十三湖は富湖と呼ばれていた。鳥海山も出雲族が昇る朝日を遥拝する神聖な山だったといえる。出雲伝承では祭神の「大物忌神」について、三輪山の大神神社の祭神「大物主」と通じるので、富家の祖神「事代主命」だろうと伝えている

出雲口伝によれば事代主を祖とする富家の第八代天皇の孝元天皇の皇子が長髓彦（大彦）であり後の安倍（阿部）一族であると伝える。安倍家の血を引く藤原清衡が最も近い真西にある出雲鳥海山（とみ）の事代主命の神気を中尊寺に引き寄せて平和を祈るための祭祀線といえる。

●ちなみに、鳥海山に饒速日命（徐福）が天下った説は、物部軍が大彦（長髓彦）の子孫一族を追って北へ攻めてきた時の出来事を伝えているとのこと。

●この祭祀線に信憑性を感じるもう一つの大きな理由は傾けられている建物の向きである。中尊寺金色堂も熊野新宮社も後方には鳥海山がある。拝めば鳥海山大物忌神に念は届く。社殿こそあれども出雲系の祀り方となっている。



●そしてなにより、名取熊野新宮社が1123年創建。それを待っていたかのように中尊寺金色堂は1124年上棟されている。

[追記/飛鳥神社]

●「ガソリンスタンド横に小さな社の飛鳥神社があって、それは酒田市の飛鳥から分霊されたい」と情報をいただいたので調べてみた。なんと、金色堂から熊野新宮社のラインを伸ばすと見事にぶつかってきた。とはいえ何でここに飛鳥の飛鳥神社が…

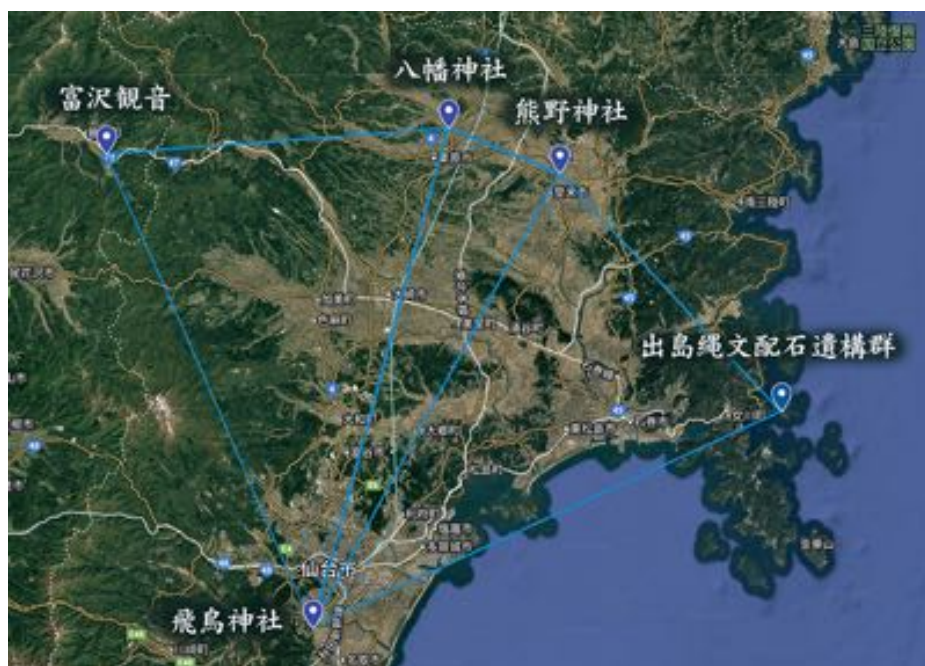
●金色堂と熊野新宮社とつながった鳥海山の大神。この神は飛鳥（とびしま）の小物忌神（おものみがみ）と対なので「飛鳥から来た神社」が飛鳥神社と呼ばれるようになったのでは…と思った。しかし、ふと酒田には合併して酒田になった旧平田町に飛鳥（あすか）があることを思い出した。飛鳥神社の主祭神を確認すると事代主命だった。金色堂はこちらのラインでも事代主とつながっていた。



●そんな折、歴史ブログ「仙台まほろばの道」さんが、女川町の出島のことをUPされて興味深く拝読した。その後、名取の飛鳥神社の写真をグーグルマップで地上に降りて分析していた。隣接するガソリンスタンドの擁壁は飛鳥神社の参道に平行していることがわかったので、社はどこを向いて建てられているかをその擁壁に合わせてラインを引き調べてみた。どこかを遥拝しているなら米沢・新潟方面だが、どこもぶつからなかった。ならば正面はどこかとラインを伸ばすと…なんと👉



●出島にぶつかった！ しかも「仙台まほろばの道」さんが紹介していた出島縄文配石遺構群のすぐ近く。ブログを拝見した10分後のできごとに、なんと本当の歴史を開きたがっている神様たちの思し召しに思えてきた。さて、祭祀線研究家としては、古代遺跡は大聖地と言える。すぐに祭祀線を探してみた。すると…



■富沢観音（最上町） ←← 64.753km →→ 飛鳥神社 →→ 64.753km →→ 出島縄文配石遺構群
 →→ 64.753km →→ 熊野神社（栗原市）
 →→ 64.753km →→ 八幡神社（登米市）



■飛鳥神社 詳細不明 名取市高館熊野堂岩口上

●酒田市 飛鳥神社の由緒

飛鳥神社は山形県酒田市飛鳥に鎮座している神社です。飛鳥神社の創建は宝亀5年（774）に大和国飛鳥坐神社を勧請分祀したといわれています（地名の飛鳥もここが由来という説が有力）。付近には出羽国府と思われている城輪柵や延喜式 式内社である小物忌神社などがあり比較的早くから朝廷側の影響下にあったと考えられます。旧平田町飛鳥周辺は今で言う宿場町にあたる「駅」が設けられ、延喜式には最上川を使用した、水運の水駅として「飽海駅」として記され、駅馬10匹、船5曹が配備されていたといわれています。中世以降は神仏混合状態になり、隣接する敷地には鎌倉時代に彫られたという仁王尊が祀られていて当時の名残を見る事ができます。江戸時代に入る庄内藩主酒井家から庇護され、享保10年（1725）に行われた仁王尊軀衣替え際には4代藩主酒井忠真が金子を奉納しています。飛鳥神社の社地や社殿の規模も大きく、入母屋妻入り、銅板葺き、平入、向拝の幅は3間あり4本の柱で支え上部は唐破風が設えられています。彫刻も細部に渡り細かく施され、特に4本の蝦虹梁にはそれぞれ力士が屋根を支えています。秋田県南部から山形県北部の社寺建築に見られる力士像の形態を継承しています。飛鳥神社に伝わる神事として「裸まいり」や「湯立神事」が揚げられますが、特に湯立神事は1200年前から継承されていると言われ、修験神楽とも呼び神話の世界を9つの舞曲で演じられます。飛鳥湯立神楽は昭和56年（1981）に酒田市（旧平田町）指定無形民俗文化財に指定されています。

祭神：八重事代主命、須佐之男命、大己貴命。 ※サイト「山形県の町並みと歴史建築」さんより抜粋
 山形県酒田市飛鳥堂之後92

■出島縄文配石遺構群

宮城県女川町の出島には、配石遺構群は、縄文時代前期から平安時代にかけての土器片が出土する配石遺構群と貝塚があります（貝塚については、以前は南斜面を「四子館貝塚」、北斜面を「山下貝塚」と言われていましたが、現在は出島貝塚と言われています）。辺見鞆高氏が率いる小牛田農林高校郷土研究班が1960年代から1970年代にかけて調査して、配石遺構群や貝塚の存在が明らかになりました。この配石遺構群はいわゆる「環状列石」ではありませんが、地元では「ストーンサークル」と呼ばれています。辺見鞆高氏も調査報告書の中で環状列石が存在した可能性にふれています。この小牛田農林高校郷土研

究班の調査以降、本格的な調査は行われておらず、1989年に道路工事のために調査した報告書がある程度で、この出島遺跡の全容は明らかになっていません。

■富沢観音（山形県最上町）

清和天皇の貞観五年（863）、慈覚大師東北行化の途次、この地に來り形勝の地なるによって補陀落山と名づけられ、ことに駿足の馬匹各所に放牧する様を觀て、産馬に適し民の生業を利益するなりと、自ら座像の馬頭観音を彫刻し、精舎を建立して安置、地方民を信仰に生かしむると共に大いに産馬繁殖を奨励された。これが当観音の始まりである。

後、小栗判官正清が横山の奸計に陥り、楠の馬場で鬼鹿毛の馬に乗せられたが、幸いに乗り回し危難を免れたのは日頃念ずる観音の功德によるとその楠を以て觀世音を刻み、これを良馬の産地に祀って後世駿足の名馬を産せんことを祈らんとし、その臣、小太郎に命ず。小太郎尊像を背負い各地を訪ねて当地に來たり、当初は馬匹の守護仏であり、その上、小国と小栗は国音相近しと喜び、古來名馬の産地なれば主命を果たす好適地として携え來った。觀世音を納めて立ち去った。これが御厨子外の御前仏である。

本観音（富山馬頭觀世音）は、東北三大馬頭觀音の一つで、県内外から多くの参詣者が訪れる。

山形県最上郡最上町富沢 1378

■八幡神社（宮城県栗原市）

神護景雲元年（767年）、この地築館城生野に伊治城が築かれた。城址の一角の東南に鎮座している。この時代に祀られたと考えるべきか。記録としては、奉納された石灯燈に文化14年（1817年）8月15日とある。参考ながら城生野地区にある照明寺の開山は、天正18年（1590年）という。神社隣接の一旦川地点は、平安時代天喜4年（1057年）前九年の役の発端となる阿久利川の戦いの地に比定されている拠点である。安倍氏と源頼義氏の戦であるが、この頃に祀られたと考えるべきか定かでない。明治10年5月村社に列す。祭神/応神天皇 宮城県栗原市築館字城生野地藏堂 15

■熊野神社（宮城県登米市） 詳細不明

細谷には熊野神社があり、そのあたりを「くまんど」といっている。このことは、熊野信仰が、堂を建てた当時あったことを示している。熊野には、本宮・新宮・那智社の三社があり、昔から修験の聖地といわれ、その道場でもあった。当地方には、羽黒派の修験が多かったが、葛西氏奥州惣奉行となったことにより、熊野信仰が民衆へ広がっていったとも考えられる。また、熊野へは距離的にも経済的にも参詣は困難だったため、熊野神社の分社としてこの熊野堂が建てられ祀られたと思われる。

※サイト「石森歴史の散歩道」さんより抜粋 宮城県登米市中田町石森西細谷 4 5 6

●またまた富の字がつく歴史ある赤倉温泉の富沢観音や栗原市の八幡神社とつながった。登米市の熊野神社も名取の熊野新宮社と関わりがあるのかもしれない。小さな社の飛鳥神社だが大切な役割を持っているように感じる。それにしてもこの祭祀線は古すぎる。名取熊野新宮の創建以前からあったのだろうか…

[追記 2025. 10 月]

●小さな社だが、栗原市の八幡神社の由緒が気になった。アテルイら蝦夷と朝廷の戦いの始まりの舞台となった伊治城（767年）の守りとして建立されたか、前九年の安倍氏と源頼義らの戦いのために建立されたか…

歴史ある富沢観音と八幡神社の間には誰がいるのか!?! 寄り道して祭祀線を探してみた。すると…



■古懸山不動院國上寺

古懸山国上寺は人皇第三十三代推古天皇御宇十八年（610）、国家北門鎮護のため、聖徳太子の命を受け秦川勝公が阿闍羅山上に伽藍（がらん）を造営、智者大師附弟圓智上人が不動明王、両童子を刻して安置し開基、阿闍羅山不動院と号したのに始まる。

建長六年（1154）、北条時頼公が本尊ならびに法具を現在地に奉移し、三森山不動院古懸寺と改め、鎌

倉將軍数代の祈願所となった。

天文五年（1536）、お堂、坊舎を大檀那金藤上野守造営、天正十六年（1588）、津軽右京亮為信公が国上山不動院古懸寺と改め、鎮護国家、津軽家領域安泰のため、さらに仏殿、山門、護摩堂、大師堂などを造営し、寺領地二百町歩、寺録二百石を贈り津軽家歴代の祈願所とした。

津軽二代目藩主信牧公により古懸山不動院国上寺と改められ、直筆の額面を賜り厚く信仰された。

明治四年（1871）、廃藩のため寺領地、寺録を奉還、明治二十六年（1893）旧正月七日の火災のため、本堂ならびに仏堂を焼失、焼失を免れた護摩堂を本堂として、昭和五十四年（1979）現本堂建立まで寺務を執行した。

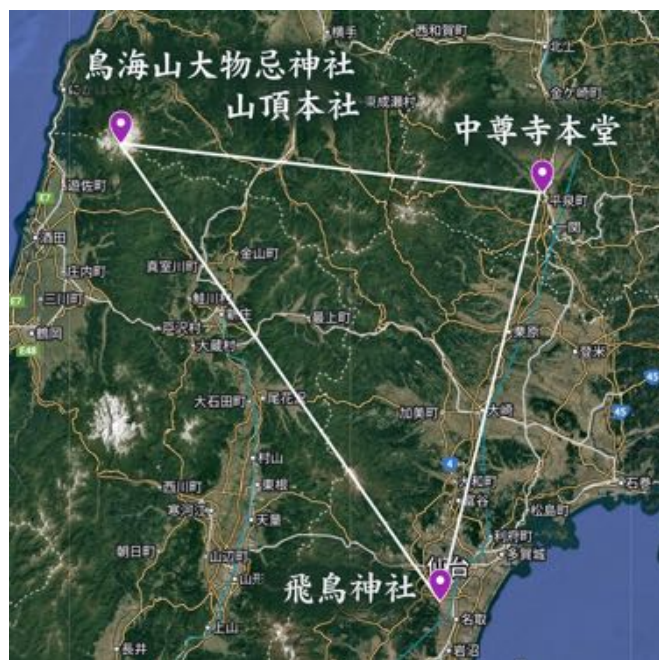
津軽三不動尊の一つで、地域の信仰も厚く、さらに所蔵する棟方志功の版画・不動尊のほか、脇（わき）壇の見返り不動尊などが安置されている。

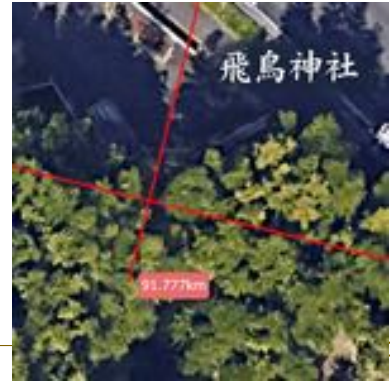
平川市碓ヶ関古懸門前1-1

●いたのは坂上田村麻呂でも源頼義でもなかった。朝日岳信仰を千年封じした北条執権時頼だった！
愛妾唐糸の弔いに来た美談「辛糸伝説」を外面にし、裏では東北攻略のためにせっせと祭祀線張りをしていたようだ。八幡信仰だった源頼義が建立した八幡神社の祭祀線に便乗して國上寺を置いたのだろうか。

●さて飛鳥神社には、もしかしたら中尊寺金堂からではなく「本堂」からの古い祭祀線があるのかもしれない。

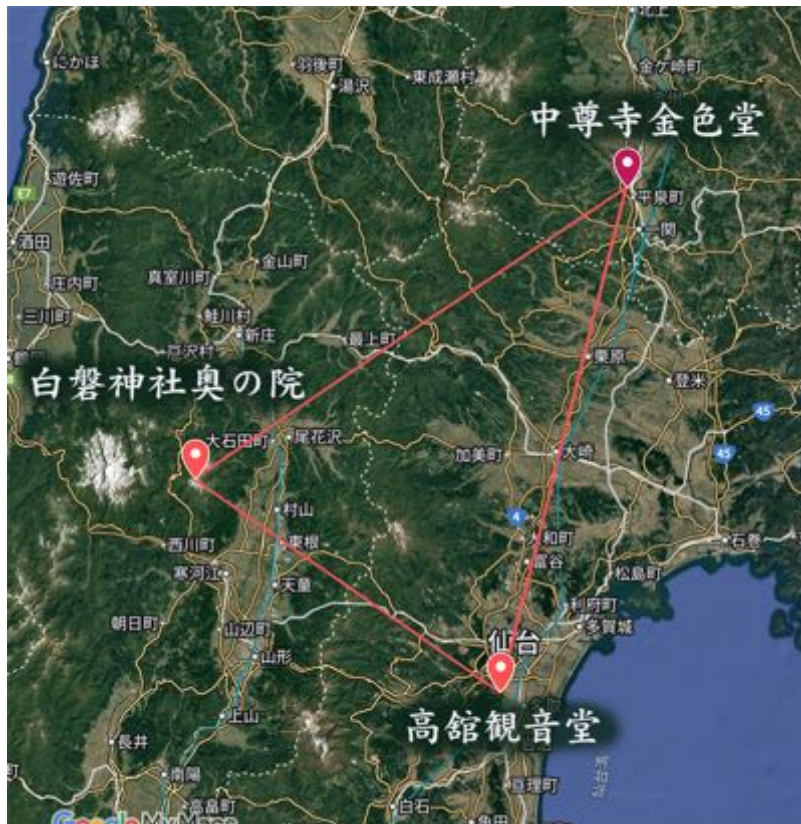
すると、やはり…



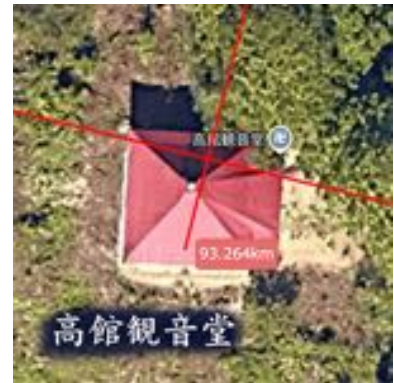
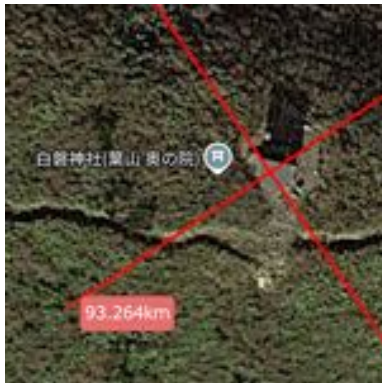


●祭祀線は鳥海山火口にある大物忌神社山頂本社の 20 m そばを通った。やはり、こちらの三角祭祀線のほうが古い。ということは、円仁が開いた 850 年当時の山頂本社はそのあたりにあったのかもしれない。金堂はこの基本の祭祀線を基に飛鳥神社とも繋がる位置に熊野新宮社を置いたと言える。益々もって熊野新宮社は名取老女の信仰を使って藤原家が建てかえたことに信憑性を感じられる。とはいえ、そんな大切な神社なのにどうして小さい社だったのだろう…。円仁時代は立派だったのだろうか…いずれにせよ、小さく詳細不明な神社とはいえ侮れない典型だと自戒せずにはられない。

●もう一つ中尊寺金堂と名取をつなぐ有力な祭祀線を見つけた。



■白磐神社奥の院（葉山） ←← 93.264km →→ 中尊寺金色堂 →→ 93.264km →→ 高館観音堂



■白磐神社奥の院

白磐神社（はくばんじんじゃ）。通称：葉山神社。

当神社の創建時期は不明。「葉山」は本来「端山」で、「奥山」に対して里に近い山という意味なので、全国各地に同名の山があり、区別するために「村山葉山」とも通称する。地域や時期によっても違うが、「出羽三山」は江戸時代初期まで「羽黒山」・「月山」・「葉山」を指し、「湯殿山」は「総奥之院」の扱いだったともいう。そういう事情で、古くから「葉山修験」という一派が活動しており、その中心を成していたのが「医王山 金剛日寺 大円院（葉山大円院）」だったという。その神仏混淆の縁起によれば、天地開闢の折、国常立尊が「葉山」山頂に五色の華、即ち妙法蓮華經の5文字が開くのを見て、天下って「葉山地主神」となった。その本地は薬師如来である。大宝2年（702年）、役小角（役行者）の命により、弟子の行玄が開山したとされる。そして、「日本三代実録」貞観12年（870年）の記事に、出羽国の「白磐神」と「須波神」に従五位下の神階を授与したとあり、そのうちの「白磐神」が当神社のこととされている（国史現在社）。その確実な証拠はないが、現在も「葉山」の南側に広く「白岩」という地名が残っており、通説といってよい。中世以降も、当地の領主に篤く庇護されたが、16世紀中頃、ともに「葉山」を「奥之院」としていた大寺「瑞宝山 慈恩寺」が離反したため「葉山修験」は次第に衰退した。それでも「大円院」は新庄藩の祈祷所などとして重用され、最盛期には宿坊19坊、末寺51カ寺があったが、江戸時代中期には宿坊が6坊まで減少、明治時代に入ると修験道が禁止されたこともあって、ますます衰退した。更に、第二次大戦後、寒河江市白岩字畑にあった本堂付近がGHQアメリカ陸軍の演習場の着弾地とされたため、昭和30年に本堂を解体・縮小し現在地（村山市岩野）に移転したという。この間、「白磐神社」の変遷はよくわからないが、「葉山薬師権現」などと呼ばれ、「千座川」の水源の神として、主に「作神」（農業神）として信仰されていたようであり、新庄藩主・戸沢氏により何回か「奥之院」（社殿）建替えがなされた記録がある（文久元年：1861年など）、現在では「葉山」山頂付近に社殿があって、「葉山神社」とも通称されている。現在の祭神は大己貴命と国常立命。

山形県寒河江市大字田代字葉山1192-2。 ※サイト「神が宿るところ」より抜粋

■高館観音堂と熊野那智神社

伝説によると、養老3年（719年）閑上浜の漁師が海底から御神体を引き上げたところ、その光の輝きの止まる所が高館山であったことから、そこに宮社を建て羽黒飛龍神として祀ったという。一方「閑上」の地名の由来として、貞観13年（871年）に靈験あらたかな十一面観音像が波に揺り上げられているのを漁師が見つかり、それが現在高館山の那智神社に那智観音像として安置されている、という話も伝わって

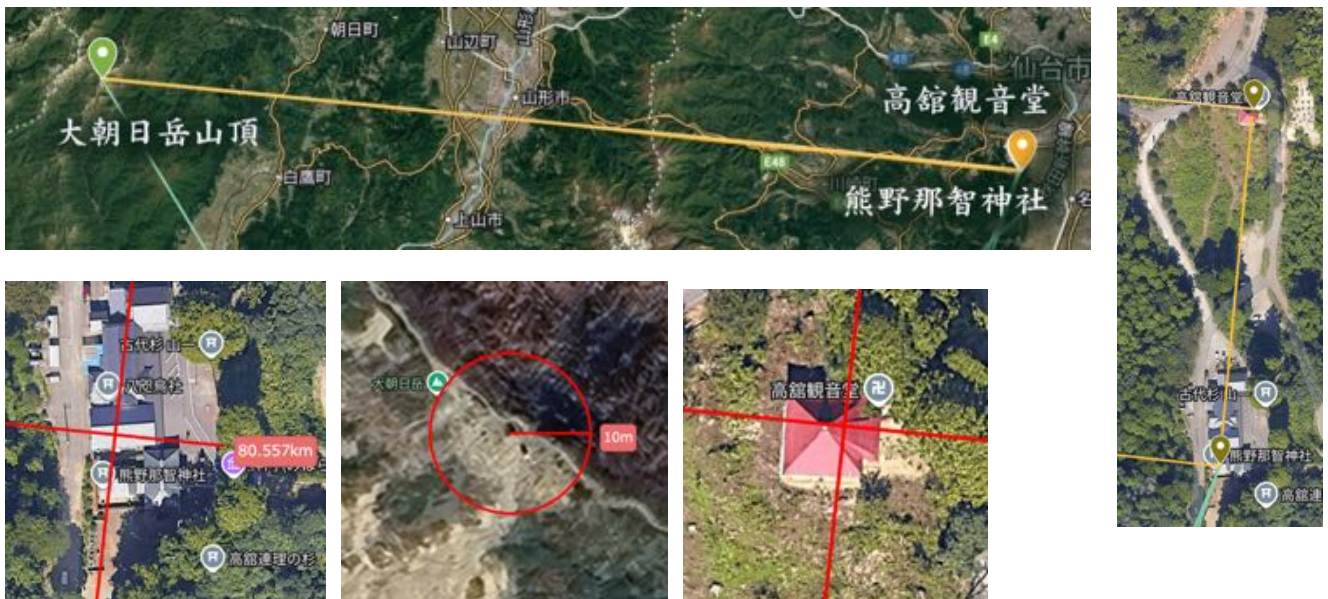
いる。

その後、名取老女の熊野三神勧請にあたり、那智の分霊を当社に合祀し熊野那智神社と改称した。近世は伊達家の厚い崇敬を受けて、社殿の造営や社地の寄進などを受けた。明治元年（1868年）の太政官布による神仏分離令を受け、社殿に奉納されていた御正体である懸仏などが関係者によって密かに埋められたが、明治31年（1898年）7月の拝殿移築の際床下から再発見された。このうち、懸仏・銅鏡41点が国の重要文化財、懸仏・銅鏡114点が宮城県指定有形文化財となっている。かつては御神体が揺り上がった場所である閑上浜までの浜降り神事が行われ、正月には「カラスゴ（牛王宝印）」を氏子に配布していた。名取市高館吉田館山

●高館観音は871年、中尊寺金色堂は1124年。観音堂は同じ場所にあったのなら清衡が高館十一面観音の神気を引き寄せるためと単純に考えられる。あるいは、中尊寺金色堂の創建にあたり名取老女が、自身が修行した葉山とつながる場所に観音堂を移動させたのか…。

●ちなみに、別頁「名取 熊野三社と名取老女と朝日岳信仰」で取り上げたが、大朝日岳大日如来の神気を引き込むために高館観音堂と熊野那智神社は同じ距離に配置されている。参考に以下に抜粋しておく。

■熊野那智神社 ←←← 80.557km ←←← 大朝日岳山頂 →→→ 80.557km →→→ 高館観音堂



- 熊野那智神社が大朝日岳から神気を引き込む配置。寺院の本堂と五重の塔も同じしくみ。
- 名取老女の朝日巫女は大日如来の化身ともされているそうなので、大日如来の大朝日岳とつながって当然といえる。東北地方で密教最高神の大日如来を祀る山は朝日岳（679年/役の小角）と湯殿山（807/弘法大使）のみ。
- 写真の横ラインを見ると、高館観音堂は大朝日岳頂上を背中を向けて正確に建てられているのがわか

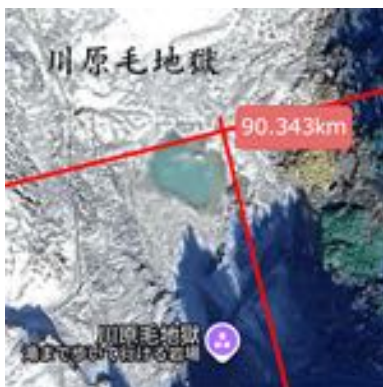
る。観音様を拝めば大朝日岳の大日如来にも念は届く。

●次は基衡の毛越寺の祭祀線を探してみる。

毛越寺



■川原毛地獄 ←← 90.343km →→ 名取熊野神社（新宮社） →→ 90.343km →→ 毛越寺金堂円隆寺跡



■毛越寺金堂円隆寺跡

基衡が万宝を尽くして建立した勅願寺で、本尊は雲慶作の丈六の薬師如来でした。毛越寺の中心伽藍で、東西に翼廊が出て南に折れ、東廊先端には鐘楼（しゅうろう）が、西廊先端には経楼（きょうろう）が附属していました。基壇は石造り壇上積です。経楼は、経文を納める建物です。金堂西廊の南端、鐘楼（しゅうろう）と対称の位置にありました。

●毛越寺の由来

白鹿伝説

寺伝によると嘉祥3年（850）慈覚大師が東北巡遊のおり、この地にさしかかると、一面霧に覆われ、一歩も前に進めなくなりました。ふと足元を見ると、地面に点々と白鹿の毛が落ちておりました。

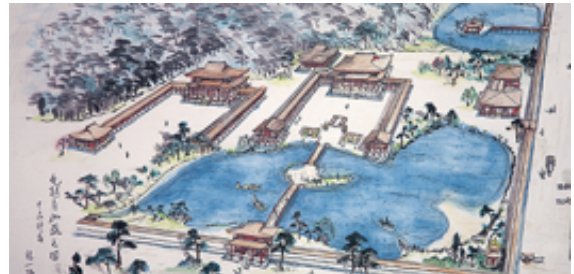
大師は不思議に思いその毛をたどると、前方に白鹿がうずくまっておりました。大師が近づくと、白鹿は姿をかき消し、やがてどこからともなく、一人の白髪の老人が現われ、この地に堂宇を建立して霊場にせよと告げました。大師は、この老人こそ薬師如来の化身と感じ、一字の堂を建立し、嘉祥寺と号しました。

これが毛越寺の起こりとされます。

歴史

毛越寺は慈覚大師円仁が開山し、藤原氏二代基衡（もとひら）から三代秀衡（ひでひら）の時代に多くの伽藍が造営されました。往時には堂塔40 僧坊500 を数え、中尊寺をしのぐほどの規模と華麗さであったといわれています。奥州藤原氏滅亡後、度重なる災禍に遭いすべての建物が焼失したが、現在大泉が池を中心とする浄土庭園と平安時代の伽藍遺構がほぼ完全な状態で保存されており、国の特別史跡・特別名勝の二重の指定を受けています。平成元年、平安様式の新本堂が建立されました。

岩手県西磐井郡平泉町平泉大沢5 8



■川原毛地獄

川原毛地獄は大同2年（807）に月窓和尚に開かれた霊山で、信仰施設として霊通山前湯寺が開山されたと伝えられています。月窓和尚がどのような人物だったのかは不詳ですが、現在の川原毛地獄の景観でも判るように、荒涼とした空間は非日常的な霊地として、古代から周辺の住民達にとって素朴な自然崇拜信仰が行われていたのかも知れません。その後、天長6年（829）に慈覚大師円仁が来訪し法羅蛇地藏と自作の面を奉納したとされます。



慈覚大師円仁は奈良時代の高僧で天台宗第3代座主、ようするに天台宗の大本山である比叡山延暦寺（滋賀県大津市坂本）の首座という格式の高い人物です。その円仁が35歳の時、天長6年（829）から天長7年（830）の2年間東北地方を巡錫したという記録が残されています。東北地方には円仁縁の寺院が331寺余あるとされますが、実際、年号と合致するものは少なく川原毛地獄の前湯寺もその1つで興味深い所です。古代から中世にかけての密教（天台宗・真言宗）は世俗世界から隔絶された山深い霊地を修行の場として、修験道として発展しますが、川原毛地獄はその絶好の修験の場だったのかも知れま

せん。 ※サイト「秋田県：歴史・観光・見所」より抜粋

秋田県湯沢市高松番沢

●神社仏閣ではなかったのに、危うく見落とすところだった（汗）

川原毛地獄の毛が気になって試しに調べてみたら、大変な自然聖地だった。ラインは最も谷である池を通っている。

●慈覚大師の足元に落ちていた白鹿の毛というのは、まさしく川原毛地獄のことを例えたものに違いない。緑の中にポツンと川原毛色（灰白色）した神聖な存在。

「川原毛」の意味

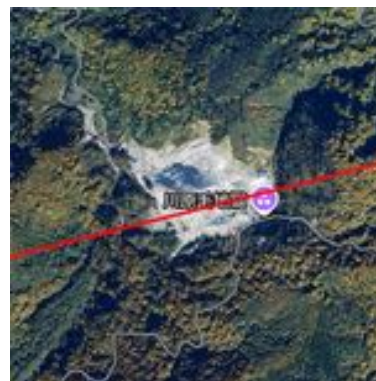
かわら - げ [かはら -] 【川 - 原毛 / 瓦毛】

馬の毛色の名。灰白色・黄白色で、たてがみ・下肢・ひづめが黒いもの。

鹿の意味

夏は褐色の地に白いまだらの点があり、冬は灰褐色の毛なみとなる。

「鹿」には、シカ科の哺乳動物そのものを指す意味のほか、神の使いや神聖な存在、縁起物、そして「帝位や権力を争うこと」といった比喩的な意味もあります。特に神道では、神様と深く関わり、幸運や長寿、勝利をもたらす象徴とされています。

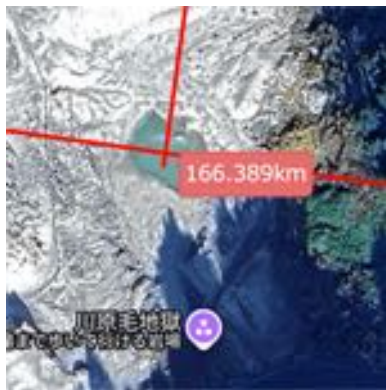


●毛越寺の金堂円隆寺は藤原基衡が万宝を尽くして建立した勅願寺である！

●では、川原毛地獄と毛越寺は元々どこと繋がっていたのかを調べてみた。



■川原毛地獄 ←← 166.389km →→ 十和田湖 →→ 166.389km →→ 毛越寺金堂円隆寺跡



■十和田湖

十和田神社の創建についての縁起は2つある。1つは十和田神社の創建は807年(大同2年)で、征夷大將軍坂上田村麻呂が東征のおり湖が荒れて渡れず、祠を建てて祈願しイカダを組んで渡ったという。もう1つは、南祖坊に関わる伝説である。かつて十和田湖は、十和田青龍権現を祀る神仏習合の霊山であり、熊野や日光に比すべき北東北最大の山岳霊場であった。それはまた、僧侶や修験者の山岳修行の場であり、民衆の信仰登山、山岳修行の山であった。

十和田神社は、明治初年の神仏分離以前は「額田嶽熊野山十灣寺」を号する神仏習合の寺院であり、十和田青龍権現を祀り、現在の拝殿の場所に観音を本地仏として安置する仏堂「十和田御堂」が建っていた。また、十和田神社の右奥の岩山を登った先の台地は、南祖坊が入定し青龍権現となったと伝える中湖(なかのうみ)と「カミ」の宿る御蔵(おぐら)半島の「御室(おむろ)、奥の院」をのぞむ神聖な場所であり、台地を降りた中湖の水際には、参詣者が占いと祈り(散供打ち)を行う占場(オサゴ場)があった。

その頃は十和田湖自体が聖域であり、十和田火山外輪山の内側は本来、女人禁制の世界であった。人々はその全体を「十和田山」と名付け、カミの住む山の意味で「御山(おやま)」と呼んだ。外輪山への登り口は、御山に入る入り口になっており、川や滝、鳥居や神社が俗界と聖域を分ける最初の結界となっていた。そして、参詣者が長い山腹の道を登りきって最初の外輪山山頂の峠に至った時、突如視界が開けて眼下に湖水が広がる、そこが第二の結界であり、湖を礼拝する遥拝所が置かれ、峠を下った湖畔には最初の散供打ち場「占場」が設けられた。人々はさらに湖畔の長い道をたどり、第三の結界解除川(はらいかわ、現在の神田川)でみそぎを行ったあと、林立する鳥居と杉並木の参道を通して、御山の中心十和田御堂に至った。

●十和田神社のある中山半島の先端と御室奥の院がある御倉半島の先端から臨む真ん中あたりが同距離になる地点。東北を守る背骨的な祭祀線ができあがった。

●十和田神社は「額田嶽熊野山十灣寺」を号する神仏習合の寺院。ここも熊野信仰だった。

●基衡は自然聖地の川原毛地獄と十和田湖の神氣を得て作られた毛越寺を、朝日岳信仰の神氣も引き寄せるために名取熊野新宮社を建立したのではないかと推察。名取熊野新宮社と朝日岳信仰のつながりについては別頁「名取熊野三社と名取老女と朝日岳信仰」をご覧ください。

熊野新宮社と朝日岳信仰の祭祀線↓



- 1226年毛越寺は焼失。その20年後には朝日岳信仰が北条執権時頼により千年封じとなっている。
- 調べればもっと藤原家と名取熊野のつながりは見つかると思うので見つけ次第追記することにする。

(2025.10.10 竜天太陽 記)